恋愛短編集

九条　衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛短編集

【Ｎコード】
Ｎ８３１８Ｉ

【作者名】
九条　衛

【あらすじ】
『人生は短いストーリーが連なってできている、これはその短い物語達の、ほんの一幕』　　第一幕・ぼくは『彼女』に恋をしている。そう『彼女』に。
　　第二幕・私の恋はいけないこと？
ねえ兄さん。

第一幕・絵画恋愛・その一

「また、美術室に行くのか？」
いつもの放課後、三年三組の教室を出ようとしたぼくは、親友の声に少し足をとめた。
「ああ、ぼくは『彼女』に会いに行く。僕は『彼女』に恋をしているから」
それだけ言うと、ぼくは目的地に向けて、歩を進める。
すると、後ろからぼくを追いかける足音がした。
「おまえが笹木を好きなのは知ってるよ、毎日通いつめてるもんな」
「そうなのか」
ぼくはぽつりと呟いた。
ぼくは笹木という人に恋をしているのだろうか。
「まあ、笹木は美人だから。べつに悪いとは言わないけど。競争率高いぞ、あの子」
「そうなのか」
いや、ぼくが恋をしている相手は『彼女』であって、笹木という人ではない。
「もうすぐ、卒業式だから、早く告白したらどうだ？　なんてな」
そう言って、親友は校門へと歩いて行った。
ぼくは彼についていかず、校舎の隅にある美術室へと向かった。
ぼくが美術室のドアを開けると、そこには『彼女』と、それに向かい合って座っている、女子生徒がいた。
「また来たんですね、先輩」
その女子生徒は、ぼくを見るとにっこりと微笑んで、そう言った。
だけど、ぼくの視線は『彼女』にしか向いていなかった。
女子生徒の前にいる、一人(いちまい)の女性(かいが)。
それが、ぼくが恋をしている人(え)。
「今回も、うまく描けましたよ、先輩」

女子生徒は、またぼくに微笑みかける。うれしそうに。
ぼくも『彼女』に言う。
「ああ、きれいだ」
そういうと『彼女』は微笑んでくれる。
そして、ふと、女子生徒が立ち上がった。
「じゃあ、また一緒に帰りましょう」
そして初めて僕は『彼女』から目線をそらして、女子生徒のほうへ向く。
「ああ、いいよ」
そして、ぼくは名前も知らない女子生徒と帰る。
この子は、誰だろう？
『彼女』にぼくは恋をしている。
一緒に帰るこの子は……
ふと、ぼくは横を向いたけど、そこに『彼女』以上の美しさはなかった。

第一幕・絵画恋愛・その二

私は恋をしている。
今日は卒業式。
本当は、二年生の私は、三年生の見送りに行かなければならないのだけど。どうしても完成させたい絵があるからと、美術室にこもっていた。
今日は卒業式。
たぶん、あの人に会うのも、もう最後、
私はあの先輩に恋をしている。
でも、告白はしない。たとえ、今日会えるのが最後でも。
断られるのが怖いんじゃない。
……知ってしまったから。先輩が誰を見ているのか。
　カラ　カラ
空き缶が転がったみたいな音をたてて、ドアが開く。
「また来たんですね、先輩」
今の私は上手く笑えていただろうか。
「今回も、上手くかけましたよ、先輩」
嘘だ。今日は手が震えて、まったく上手くかけなかった。
先輩はこっちを見る。微笑みながら。
「ああ、きれいだ」
見ているのは、私の描いた絵。
その視線にたえられなくなって、私は早口に言う。
「じゃあ、また一緒に帰りましょう」
その言葉に、先輩はいつもどうり答えてくれる
「ああ、いいよ」
そっけない返事。
でも、いいんだ。一緒に帰れる、それだけで……いいんだ。
「……笹木」

不意に、名前を呼ばれた。
私の名前、知ってたんだ。
なぜか、涙がこぼれそうになった。
「な、なんですか？」
先輩は、微笑んだ。

第一幕・絵画恋愛・その三

今日は卒業式だった。
僕は卒業式のあと、親にも会わないで、校舎の隅を目指していた。
彼女に会うために、
　カラ　カラ
落ち葉が風に飛ばされるような音をたてて、扉が開いた。
そこに彼女はいた
「また来たんですね、先輩」
女子生徒は微笑みながらそう言った。
でも、それは悲しみだった。
「今回も、上手くかけましたよ、先輩」
本人もそうは思っていないのだろう。そこにあるのは、悲しみの混じった色だったから。
僕は、悲しみの混じった彼女の代わりに微笑んであげた。
「ああ、きれいだ」
そう言ってあげた、なのに彼女は微笑んでくれなかった。
「じゃあ、また一緒に帰りましょう」
女子生徒が早口で言う。
「ああ、いいよ」
彼女が笑わないから、つい、そっけなくなってしまった。
女子生徒は僕の後ろをついてくる。
もう、これも最後なのかな。
彼女と帰るのは。
「……笹木」
そう、笹木。
彼女は笹木。
「な、なんですか？」
笹木は涙声で聞いてくる。

なぜだろう、僕は『彼女』に、笹木の絵に恋をしていたのに。いつからか、笹木自身を見るようになった。
なぜだろう、『彼女』に以前までの美しさは無いのに、僕はまだこの美術室に来続けている。
でも、もう最後。
だから、今日は彼女を、笹木を見て言おう。
「きれいだ。僕は君に恋してる」
いや、そうじゃなくて
「――――――君が、好きだ」

第一幕・絵画恋愛・後日談

私にとって、一生忘れられないあの日から、もう一年がたった。
あのときから、私はあの人と会っていない。
今日は卒業式、今度は私が見送られる番だ、
だけど私は去年と同じように、仕上げたい絵があるからと美術室にこもっている。
大学は、去年から誘われていた美術大学に入ることにした。
あの人と同じ大学に入ることも考えたけれど、絵は続けたいから。
「……できた」
私にとって絵はあの人と私を結び付けてくれた、大切な存在だから。
そういえば、あの人は私の絵を『彼女』と呼んでいた。
「風景画だったのに」
そう、私が描いていたのは風景画だ。
なのに、あの人は『彼女』と呼んでいた。
「じゃあこれは『彼』なのかな」
できた絵を見て自然に微笑みを浮かべる。
そこに在るのは、あの人の絵。
あの日から、一年かけて描いた絵だ。
「これを見せたら、あの人はなんて言ってくれるだろう」
人物画は初めてだから、上手くいかなかったかもしれない、
だけど、これで満足だ。
私はできた絵を眺めて微笑んでいた
――――――――その時
カラ　カラ
空き缶が転がったみたいな音をたてて、ドアが開く。
「また来たんですね、先輩」
私は一年前と同じように、そう言った。

今度こそ、満面の笑みで。

第二幕・兄妹恋愛・その一

確かに、私はあの人を愛している。
それは、いけないこと？
確かに、あの人と私は血がつながっている。
それは、いけないこと？
私があの人の妹だからって、私があの人を好きになってはいけない理由にはならない！
だから、今日、私は告白する、
実の兄に。
「早く来てっ！」
私は校舎裏で待っている。
兄と私は同じ高校に通っている。私は一年生、兄は三年生。
だから、下駄箱に呼び出しの手紙を入れるのも簡単だった。
それなのに、
「来ない……」
ずっと待っているのに。兄は来ない。
いたずらだと思われているのだろうか。名前は書いていないけれど、筆跡で私だと分かるはずなのに。
……でも、来なくてよかったのかもしれない。
あの人に断られたら、嫌われたら、私は生きていけないから。
これでよかったのかもしれない。
……そう、きっとそうだ。
……これで、いいんだ。
そう思っているはずなのに、私はここを離れない。離れられない。

第二幕・兄妹恋愛・その二

「さて、どうするか」
僕は自分の下駄箱の前で、固まっていた。
手には一枚の手紙。
……実の妹からの、呼び出しの手紙。
本当は、あいつの気持ちは分かっていた。
あいつの僕を見る目は、実の兄を見ている目じゃない。
そう、わかっていたのに。
なのに、僕はずっと考えることを先延ばしにしてきた。
その結果がこれだ。
時計を見る、もう一時間もこうしている。
あいつは、帰っただろうか。
いや、あいつは待っている、僕が来るまで。あいつはそういう奴だ。
「僕は、あいつが、好きなのか？　断るべきなのか？」
答えは出てこない。
僕の妹は、きれいで、頭もいい。兄として誇るべき妹だ。
でも、あいつは俺を好きになった。
どうしてなのかは、僕にはわからない。
好きになることに、理由なんてないのかもしれない。
「でも、僕はあいつが好きなのだろうか？」
もう何回目かもわからない疑問。
……あいつはずっと僕を見ていて。
いつの間にか、僕もあいつを見ていて。
これは、やっぱり……
僕は頭をふった。
「僕は、あいつの兄貴だ、だから……」

第二幕・兄妹恋愛・その三

足音が聞こえた。
「兄さん……」
来た。
待ち人が、
私の愛した人が、
やっと来た。
「兄さん、私は……」
私は、あなたのことが……
「僕は、おまえと付き合えない」
――――――――は？
「僕はおまえを妹だとしか思えない」
ああ……
ああ、そうか。この人は知っていたのか。私の、この気持ちを。
「僕は、おまえの兄貴だから。付き合えない」
ああ、なんて無様なんだろう。
この人は知っていたんだ、知っていて、この言葉を言っている。
私がどれほどこの人を思っているか、
私がどれほどこの人を愛しているか、
この人は知っててて、分かっててて、この言葉を言っている。
……それは結局、私の独り相撲だったんだ。
「ごめんなさい、兄さん」
もう、涙も出ないぐらい、おかしかった。
はは、そうか、私一人、おかしかったんだ。
何をしているんだろう、私たちは兄妹なんだ。
……兄妹なんだ。
「先に、帰るね」
走った、力の限り、前も見ずに。振り返りもせず。

私たちは兄妹なんだ。
さよなら、愛した人。
ごめん、兄さん。
私は兄さんの妹だったよね。

第二幕・兄妹恋愛・その四

「先に、帰るね」
あいつはそう言って、走り去った。
そっとしておこうと思ったけれど、
僕はいつの間にか追いかけていた、
それは、予感めいたものだったのかもしれない。
……彼女は前を見ていなかった。
青になる信号も、
そうして走りだす車も、
何もかも見ずに走っていた。
「……っ！」
それは、彼女の口から出た音だったのか、
僕の喉から出た音だったのか。
真っ赤な視界の中、僕は何もできなかった。
ただ、彼女に駆け寄ることしかできなかった。
……血が　赤い　血が　温かい
何もできない僕に、彼女は語りかけてきた。
「……ねえ……私……本気だったんだよ……」
「やめろ、しゃべるな！　何も言わないでくれ！　……頼む」
僕はどうしようもなかった、彼女の傷を抑えても、血はあふれてくる。
「私ね……ずっと、ずっと好きだった」
彼女は血を吐きながら、それでも僕にしゃべりかけてくる。
「あなたのことが……好きだった……」
血が、止まらない……
「好きだったよ……さよなら、私の愛した人……」
「そんな……」
彼女は僕の腕の中で、最後に笑っていた。

「……さよなら、私の愛した、兄さん」
体が、冷たい……もう……こいつは……

さよなら、私の愛した――――
――――兄さん

彼女の言葉は、俺の心に楔となって突き刺さる。

第二幕・兄妹恋愛・兄の独白

俺はあれ以来、誰も愛せなくなった。
俺の妹が最後に残した呪い。

さよなら、私の愛した――――
――――兄さん

それは決して抜けない楔となって俺の心に突き刺さっている。
彼女の思いは本当だった、なのに僕は……
「どうすればよかったんだ……」
もう、彼女とは会えない。
……そして、いまさらながらに思う。
……僕は、本当は彼女が好きだったんじゃないか。
そうでなければ、この呪いはここまで僕を苦しめなかっただろう。
彼女の思いを切り捨てて、
自分の思いを切り捨てて、
「ごめん……僕の妹……僕の愛した人」
口に出しても、楽にはならない。
「ごめん……僕も好きだったよ」
その言葉は、もう遅すぎた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8318i/

恋愛短編集

2010年10月15日21時59分発行